

参加者氏名：丸谷紅子

卒業年：1986年 卒業学部：文学部

「現地を訪問して想うこと」

校友会主催の東北応援ツアーには、3年前に宮城県コースに参加させていただき、実際に現地を見て、被災された方々のお話を聞いて、「今自分にできることは何か」を考える大変良い機会を得ることができました。今回は、校友の娘とそんな有意義な時間を共有したいと思い、娘を誘って再度参加させていただきました。

盛岡駅で各地から集まってこられた幅広い年代の校友の皆さんと合流し、バスで移動。遠野伝承園の見学、昼食後、釜石駅～盛岡駅まで三陸鉄道の震災学習列車に乗車しました。貸切列車の震災学習列車内では、乗車時間の約70分の間、三陸鉄道の社員の方から震災の体験を通じた自然の猛威や命の大切さ、人と人のつながりなどについて丁寧に解説をしていただきました。

「津波の2度逃げ」「津波てんでんこ」の教訓と、日頃から防災意識の高い小中学生の冷静な状況判断が、多くの命を間一髪で見事に救う結果となった「釜石の奇跡」のお話や、「高台移転」「ここから下に家を建てるな」という先祖の教訓を守り地域の被害を最小限に食い止め、「奇跡の集落」と言われた吉浜地区のお話が特に印象的でした。

お話を聞きながら、こうした実話や教訓をどこか遠いところで起きている話ととらえるのではなく、災害の多いこの日本に住むひとりとして「自分の身に、いつ起こってもおかしくない話」としてとらえる心構えも大切なことだと感じました。いざという時に的確な行動ができるように「てんでんこ」に込められた思いを今後も常に意識していきたいと思えます。

終点の盛岡駅から再度バスで移動し、気仙沼のホテルに到着。ホテルでは、被災された地元の校友の方々から震災当時のお話や復興の現状などを伺う勉強会がありました。自分の家や家族のことよりも住民優先で奮闘されていた公務員の校友の方々や震災後に学生ボランティアとして訪れたことがきっかけで、現在大船渡市の職員として活躍されている方々のお話を伺い、当時のご苦労や志の高さを身近に感じることができました。

また、地元の食材や郷土料理をいただくことで、そのおいしさや安全性を感じることもこのツアーのひとつの目的ですが、初めてお会いする校友の皆さんとも、夕食の交流会の時にはすっかり打ち解けていて、おいしい料理をいただきながらいろんな話題で盛り上がり、初対面の方でも校友ということだけで、安心感や親しみが持てるということを改めて実感しました。

2日目は、タピック45を見学しました。タピック45は、平成5年に県内2番目の道の駅として登録され、観光案内・売店・体験コーナーなどがあり国道45号線を通る方や市民の憩いの場だったそうです。津波の恐ろしさを後世に語り継ぐため、震災遺構として保存されているこの施設の敷地内に建てられた追悼施設で黙祷の後、復興まちづくり情報館の展示を見学しながら、校友から現地の被災の様子などを伺いました。

震災から5年半が経ち、復興の様子を伝えるメディアからの情報量もだんだん少なくなってきている現状の中、今回現地を訪れて改めて感じるのは、時の経過と共に日常を取り戻すことができている人も多い反面、まだまだ困難な状況の中、復興への長い道のりを覚悟しながらも、必死で頑張っておられる方々がたくさんおられるということです。この災害の復興にはまだまだ支援が必要であるということ、時間の経過と共に絶対に風化させてはいけないということ、現地を訪れて食事をしたり、東北の食材や特産品を購入することも地元の活性化につながる等々、まずは自分の周りの人に伝え、情報発信していくことも必要だと感じました。

今回娘と一緒にこのツアーに参加させていただき、校友の皆さんと共にとても貴重な時間を過ごすことができたことをとても感謝しています。これからも、自分にできることを探しながら、東北を応援し続けていきたいと思えます。